

## 神は細部に宿りたまう

— 『保育の中の小さなこと大切なこと』 を読んで —

本田 和子

「神は細部に宿りたまう」 本書をひもとくこと

で、心に浮かんだのは右の一文であった。いと小

さき者の声に耳を澄ますことから保育は始まり、

その声に応えようと努めることによって、保育と

いう営みは進行する。そして、子どもと保育者の

間に目には見えないが、しかし、確かな糸が結ば

れるとき、その糸を結び合わせるの、まさしく

そこに宿る「神」の力……。

この本は、守永英子さんという一人の保育者に

よって、お茶の水女子大学附属幼稚園における長

い保育生活のなかから生み出された。保育者とし

て子どもと心を寄せ合って歩もうと努めた著者

が、心の琴線に触れその心を美しく震わせた三十

余りのエピソードを、慎ましく控えめながら的確

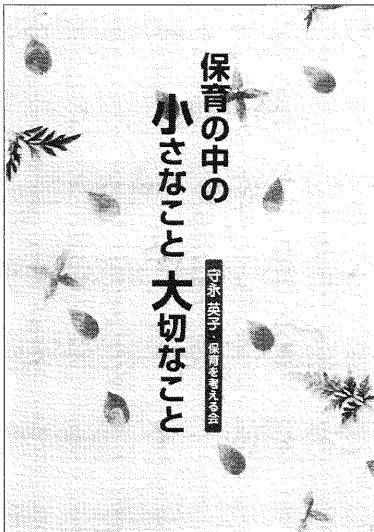
な言葉に託して、私どもの眼前に提示してくれたのである。この貴重な贈り物を感じて受け止めつつ、ページを埋める一つ一つのエピソードに心を重ね合わせて読んで行きたいと思う。

たとえば「さびしい砂遊び」（十九頁）という一文がある。入園一ヶ月の四歳のA子が、人気がない砂場にポツンとしゃがみこんでいる。その姿を「さびしい」と見た著者は、彼女の心を受け止めたいと慌ただしく思いめぐらし、彼女の流した水がくぼみから溢れ出すのを見て、少し離れた場所にその水が流れ込むための溝を掘り始める。その溝に、A子の流した水は方向を見いだしたように流れ込んだとき、A子との間につながりが生まれるたかに感じた著者は、思わず嬉しげな声を発してしまうのだ。「あ、流れてきた、川みたい」。しかし、A子はちらと目をやりはしたが何も答えず、ただ、せつせと水を流し続けるのだった。

ただ、それだけのエピソード、しかし、この光

景は、読む者を感動させ、その心にたとえようもない美しい像を結ばせるのではないか。そして、その後に、著者の思いが、「A子のくぼみに直接溝をつけて水を流すことは、A子の世界を侵すことであり、A子の水を奪い去ることである」と綴られるとき、私どもが感じた美しさと感動が誤りではなかったと納得させられるだろう。そして、

◀「保育の中の小さなこと大切なこと」  
守永英子・保育を考える会著  
フレール館 二〇〇一年



後の座談会で後輩たちの問いに答えて、著者は、つぎのように補足していた。「いつ、つながりが出来るかは、子どもの方が選ぶのだと思う。子どもの状態に関係なくこちらが押しつけるものではない。私としては、子どもの方がつながろうとしたときに、いつでもつながれるように開いておく、チャンスは用意しておきたいと思います」

(三十一、三十二頁)

心をつなぎ合わせる営みとその時は、保育者の力によって行われるのでも、一方的に設定されるのでもない。保育者は、十分に備え、心を澄まし耳と目を見開いて、「その時」は子どもによって導かれることを信じて待つことである言う。

全五章から構成された本書は、三十二のエピソードが各章にちりばめられていて、それぞれ「いぶし銀」のように慎ましい光りを放っている。否、幼い子どもたちとの間に生まれるエピソードに「いぶし銀」は洪すぎるだろうか。むしろ、

ろ、深海から採取されたばかりの磨かれる前の「真珠の粒」のようでもたとえておこうか。そしてゆつくりと丁寧ページを繰り、エピソードたちの囁きに耳を傾げるとき、読み手の心に湧き起くるのは、次のような感慨であり納得ではないだろうか。「そう、人と人がともに育つとは、こういうことに相違ない」という……。

著者は、こうも語っている、「ぱっと一瞬にして切り捨てないで、小さな思いも拾い上げて考えることではないかしら？ 小さな切り捨ててしまふようなことのなかに、案外大切なことが入つていたりするから」(二三二、二三三頁) まさしく、育みの神は、これらささやかな行為のなかに顕現し、人の営みを愛で慈しみたまうに相違ない。そして、私たちは、荒廃の声のみ響く教育界の昨今に、一筋の救いの光を見いだし、一瞬、幸せな思いに捉えられるのである。

(お茶の水女子大学)